

水田輪作におけるイネWCS専用品種「リーフスター」を用いた漏生イネ対策

籾数の少ない茎葉蓄積型の極晩生品種を利用した、後作食用水稲への漏生イネ発生や籾混入リスクの低減技術

研究開発の背景

- ・粗飼料自給率向上に向け水田での稲WCS(ホールクロップサイレージ)生産は大きく期待されている。
- ・水田輪作地帯では、翌年の食用米に飼料用イネの玄米が混入する恐れから、専用品種の導入が進まない。
- ・飼料としての十分な収量を確保しつつ、後作の食用米に漏生イネ由来の玄米混入リスクの低減技術が必要。
- ・寒冷地において極晩生で籾の登熟が進みにくいイネWCS専用品種「リーフスター」の利用を検討した。



研究成果の内容

1) イネWCS専用品種「リーフスター」を用いることにより、後作食用水稲の移植栽培の収穫適期における漏生イネの㎡当たり総籾数を「ホシアオバ」の1/3～1/4程度に抑えられる。

2) 漏生イネの玄米の粒厚別割合は、「リーフスター」では“しいな”が多く、1.9mm以上の玄米も少なく、食用品種に混入した場合の混入率は「ホシアオバ」より低くなる。

3) 「リーフスター」のWCS収穫適期(稲体水分65～70%)は出穂後14～20日で到達する。そのため、適期に収穫することで、稔実籾の割合が低く、こぼれ籾由来の漏生イネの発生リスクをより一層抑えられる。

導入メリット

※種子についての申込みは各都道府県の畜産・農産等担当窓口へ

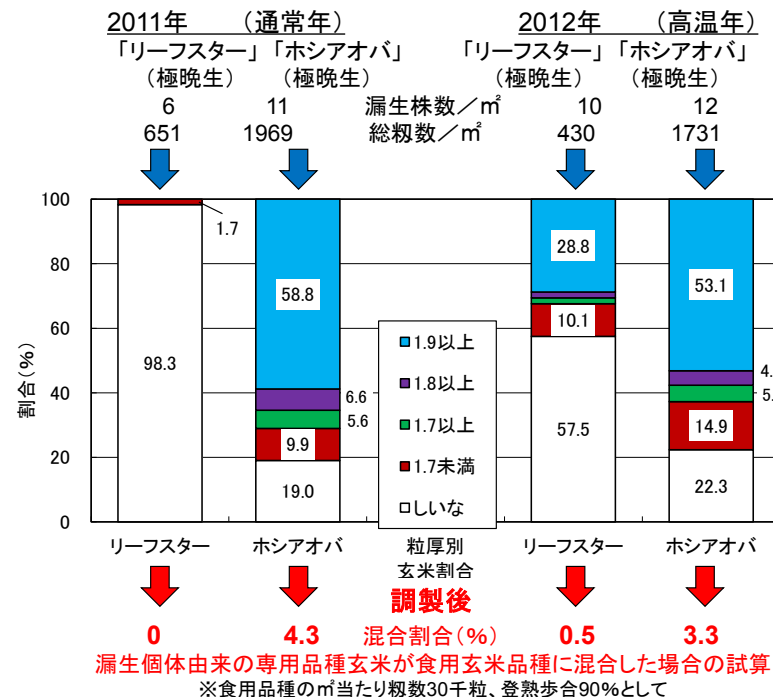
期待される効果

- ・安心して水田輪作に収量性の高いイネWCS専用品種の導入が図られる。
- ・耕畜連携がより実施しやすくなり、粗飼料自給率向上が図られる。

開発機関：宮城県古川農業試験場【予算区分：委託プロジェクト研究】

漏生稲発生モデルと玄米混合リスク試算

※春季に専用品種種子(完全籾)を500粒/㎡(実作業標準の2倍)散布処理し、食用品種栽培中での発生個体調査。サンプリングは食用品種の成熟期である9月下旬に行った。



導入をオススメする対象
耕畜連携を推進する水稲生産者等